

神 鋼 病 院



全 景

大震災時の対応と復興に向けて

(株) 神戸製鋼所 副社長 熊本昌弘
神鋼病院 理事長

阪神・淡路大震災は未曾有の直下型地震で、阪神間を中心とした各地で観測史上初の震度7を記録しました。当震災において、神鋼病院の患者さんと職員に、大きな怪我がなかったことは不幸中の幸いであり、また、この時ほど神鋼病院を建て替えておいてよかったと痛切に感じたことはありません。

震災直後、神鋼病院の医師、看護婦など職員一丸となって初期の対応に取り組まれたことが、二次災害を最小限に防ぐとともに、患者さん方にも大きな怪我なく避難できたものと考えております。これは、日頃の防災訓練の成果が発揮されたこと、また何といたっても“医療スタッフ”のプロとしての責任感溢れる行動の結果であると考えます。

入院患者さんの避難や処置ならびに震災で負傷された方々が次々と救急来院されるパニック状態の中で、院長をはじめとして病院の職員の方々の冷静・適切な対応によって難局をしのぎ、医療施設としての役割を十分に発揮されたことに対し改めて敬意を表するものであります。

その後の復旧に際し、全ての経営施策に優先させて職員の安全と生活の確保ならびに神鋼病院の復旧に取り組んだことにより、1月30日には外来診察が可能になりました。

また、恒久的な復旧工事についても、本社) 施設部、(株) 大林組殿、(株) 梓設計殿をはじめとして工事関連会社のご尽力によって4月末には工事を完了することができました。

神鋼病院は、当社従業員とその家族の診察・治療はもちろん地域の多くの方々に信頼され、ご利用いただいている地域に深く結びついた病院であり、震災直後、一時期たりといえども外来診察の延期と入院患者さんの移転を余儀なくされたのは残念でありました。

しかしながら、関係者の献身的なご努力により、非常に短期間で震災前の運営状態にもどすことができました。今後は、基幹病院として従前にも増して、地域の信頼を集める病院となるよう各位の一層のご努力、ご協力をいただきたいと思います。

今回、編集されたこの「震災の記録」が、今後の病院防災の一助となることを期待しております。

阪神大震災を経験して

院長 富永純男

1月17日午前5時46分芦屋の自宅は、激しい振動で家中が揺さぶられた。毛布を頭からかぶり、振動がおさまるのを待った。『ゆれ』がおさまり、とにかく病院だと車で家を出た。国道2号線を西へ向かうと芦屋、神戸市東灘区の国道沿いの民家がつぶれ、一部は火災をおこしていた。また、病院が倒壊しており、地震の大きさを改めて実感した。

◇院内での初期対応

予想もしなかった大きな地震に直面したわけだが、こうした場合初期の対応が大切である。

当院では、入院患者を余震を警戒して、北側駐車場などに一時避難させていた。当直の者はもちろん、看護婦の寮生、看護学院生などが応援して短時間で避難させたと聞いている。更に、地震で怪我をした患者が救急室に駆け込み、時間とともに重症患者がぞくぞくと搬送されて、救急室周辺はパニック状態であった。徒歩、自転車などで駆けつけた医師を含めて、患者の対応にあたった。

一方、警備および保全担当者は、いち早くガスの元栓の閉め、また水の元バルブを閉めた。

このため、わずかに一部の部屋が水浸しになっただけで、二次災害を防止することができた。管理部の者も駆けつけ、設備の機能回復に頑張ってくれた。

火災・地震などの予期せぬ異常事態時は、とにかく初期の対応が重要であると考えている。

しかも、48時間以内に如何に対応するかが、人的・物的損害を最小限に止めるものと考えている。患者および職員にも大きな怪我がなかったのは不幸中の幸いであった。これも、医師、看護婦などの職員全員の『医療スタッフ』としての使命感に溢れた行動の結果である。それらの職員にあらためて敬意を表するものである。

初期対応は迅速かつ適切であったと評価しているが、それは次の3点によるものとする。

- (1) 職員の使命感溢れる『医療スタッフ』としての任務の遂行
- (2) 防災訓練の成果発揮
- (3) 指示連絡システムの機能発揮

◇神鋼および神鋼グループの支援

神戸・本社、各製鉄所および関連会社より多大の支援をいただいたことに対して厚くお礼を申し上げたい。今回、支援していただいた主なものは下記の通りである。

- (1) 非常用大型発電機（加古川製鉄所、神鋼メックス（株））
- (2) 小型発電機（神戸製鉄所、神鋼総合サービス（株））
- (3) 給食（神戸・労働室、神戸製鉄所、神鋼加古川病院、KTI）
※第1便が1月18日 2時頃到着
- (4) その他支援物資（本社・総務部、神戸製鉄所 等）
- (5) 人的応援（本社・施設部、資材部）
- (6) その他（各部門）

早期に復旧できたのも各部門からのあたたかい支援があったことによるものとする。

そのお礼も兼ねて、本社・復旧対策本部、神戸製鉄所、従業員とその家族の避難先などに医師および看護婦を派遣して健康相談を行った。

◇復旧から復興に向けて

4月30日に病院の復旧工事はほぼ完了した。建物、設備および機器などの被災状況からすれば早い復旧であった。交通機関が回復していないことや来院される方々の分散などにより外来患者数は震災前の80%（5月度）であるが、徐々に増加してくるものと思われる。

ただ、復旧工事に伴う費用負担の増加、患者の伸びの鈍化などによる経営面の更なる改善努力が必要なことと、97年度に予定している法人化などを考慮すると、単なる復旧に止まらず健全経営基盤の構築に向けて職員一丸と取り組んでいく必要がある。

本年度を『復興元年度』として位置づけて、更なる運営面の合理化・改善を図っていく所存である。

◇震災の経験と対応について

震災を経験して、院内および社会的には次のような検討と実行が必要と考える。

【院内】

- (1) 危機管理体制の見直し（特に、指示・連絡系統）
- (2) ポータブル機器の確保（小型発電機、吸引機、吸入機他）
- (3) 防災訓練マニュアルの見直しと訓練（地震発生時訓練の追加）
- (4) 異常時の救急対応方法
 - 救急処置場所
 - 指揮系統
 - 関連部門の対応 他
- (5) 職員の不安除去、精神的ケア対策
- (6) その他〔非常食、通信手段、避難場所、照明 他〕

【社会的に対応が必要と思われるもの】

- (1) 医療機関の組織化（行政、病院間）
- (2) 避難所支援対策（ボランティア活動） 等

はや5ヶ月を経過し、当院もほぼ平常時の姿で運営を行っている。ここに、震災直後の職員のさまざまな対応や復旧状況をまとめるにいたったのは、2度と発生してほしくはないが、地震災害だけでなく、その他の大災害時の対応について何らかの役に立てばとの思いによるものである。

阪神大震災に遭遇して

副院長 金子滋夫

新病院に移転、開院後順調に推移してきた神鋼病院も一年もたたぬ平成7年1月17日、突如としておこった阪神・淡路大震災により多大な被害をこうむりました。入院患者、病院職員に人的被害がなかったのは不幸中の幸でありました。地震発生直後は病院と全く連絡がとれず、やっとつながった電話で“病院内は壊滅状態です”という言葉が聞かされた時は詳細がわからぬだけに、まさかの思いが胸をよぎりました。交通機関がマヒした中で徒歩で病院へ向かう道すがら、あまりの惨状に驚き、病院の建物が目に入るまでは気が気ではありませんでした。周辺の倒壊した建物の風景を次々と見るにつけ、これが旧病院のままであったならばひとたまりもなかったのではないかと思います。そのタイミングのよさにほっとしたものでした。

とはいえ内部の被害が大きく、病院機能は一時マヒ状態にはなりましたが建物本体は無事で直ちに必要最低限度の機能復帰に向けた補修が開始されました。また診療面ではとりあえず救急外来と周辺の廊下などを使用して急患の診療、投薬業務が応急的に開始されました。しかし病棟内の被害とライフラインの途絶は入院患者の診療には当分耐えられぬと判断され病棟内補修を最優先するために一部をのこして入院患者を加古川、三田、大阪など神戸周辺の病院へ移送することを余儀なくされました。受入れに心よく協力して下さった各病院の方々に心から感謝の意を表する次第であります。

復旧態勢がととのった時点で2月から恒久的修復の段階に入りました。従業員一同は自らも被災した者も多くある中で全員一致協力して医療活動、復旧活動に従事し、本社各部門、工事関係者のご努力と共に工事は速やかに進行し、5月20日に修復を完了することが出来ました。復旧工事の中には耐震にそなえた設備改善もいろいろとり入れられています。他の病院に比して早期に修復を完了することが出来たのは高く評価されてよいと思います。診療態勢も震災前の状態にもどり、ここに復旧は完了したが今後の対応については復興に向けてさらなる努力をそそがねばなりません。現況としては交通の途絶と他地域への転出などで外来患者数は大巾に減少しました。JRが開通した4月以降からはアクセスが改善するにつれて次第に増加しつつあるものの震災前の患者数まで回復するには今しばらく時日を要するであらう。

地域住民の方々との接点を広げると同時に地域の診療所との病診連携を十分に充実させて神鋼病院の診療内容をよく知ってもらい、患者増加対策を講じる必要があります。

病院内にあっては今回の震災を経験して人と人とのつながりを大切にしつつ、一致団結して種々の問題を解決して行くことが如何に大切であるかを学ぶことが出来たと思います。今後もこのことを念頭において院内の運営にあたっていただきたいと切に希望します。

只一つ非常に残念であったことは神鋼高等看護学院の損壊が激しく使用不能となり復旧がならなかったことあります。学院長としてはまことに痛恨の思いでした。学生達は寮から脱出後神鋼病院へかけつけ、入院患者さんの救出、搬送や次々と運ばれてくる負傷者の看護や亡くなられた方々の処置に従事しました。この行動に心から敬意と感謝の意を表します。関係各位のご努力により19回生は無事に国家試験を終え、病院の講堂で卒業式を行うことが出来ました。20回生は加古川市のご厚意で加古川市看護専門学校の教室へ移って勉強を続け、また加古川市民病院、神鋼加古川病院などで実習を行わせていただいています。学生達にとって今回の経験は“生きた看護”とは何かということを考えるよい機会になったと思われます。それは知識や技術だけでなく、患者さんとの心のふれあい、精神的ケアなどに自然な行動力が加わってこそ生きた看護であるということです。このことを忘れずに努力し立派な看護婦に成長してくれることを願っております。

阪神大震災に遭遇して

副院長 山田栄一

身も心も揺さぶるとてつもない激震に放心状態になっていたが、病院からの電話で入院患者を一応無事に避難場所へ誘導中との第一報を得た。家の無事を確認して、早速車で出かけた。途中山麓バイパス右手に長田方面からと思われる方角から無気味に立ちのぼる黒煙を見て、それは大変なことが起こっているのではないかと直感した。トンネルを抜け、生田川沿いに出ると、木造の民家は崩壊しており、未だ事態の重大さのよく判らない人達が三々五々近くの広場に集まりかけていた。JRの高架越しに病院の建物が見えた時、車の中から、ほっと心をなでおろした。病院には25分程で到達した。早朝のためまだ道路規制のなかったのは幸いであった。病院北側の駐車場にはすでにかなりの入院患者が避難されており、いてつく様な寒さの中、若い研修医の先生方、当直・夜勤の看護婦はもちろん、看護婦寮の殆どどの看護婦・看護学院寮から避難して来た学生達が懸命に医療活動にあたっていた。これらの若い人達の力に更めて感動と畏敬の念を抱いたのは私だけではなかったろう。酸素マスクの下から不安と恐怖におののく表情をした老婆を懸命に勇気づけている若い看護婦、重症患者の対応に追われている若い研修医、患者さん同志協力し合い励まし合っている姿にただただ力強さと感動とを覚えながら、患者さんや職員を勇気づけるのが精一杯であった。混乱の中、病棟にまだ患者さんが残っていないかと心配になり7階までかけのぼった。廊下の天井を突き破り支柱のブロックが落ちており、目にうつる有様はさんざんたるものであった。病院内部の状態は外観とは違いはるかにひどい激しいものであった。しかし患者さん達は無事に避難しており安堵した。このような極めて異常な状態の中で、当然のことながら、人命第一に行動した若い人達への感謝の気持ちと驚きとで涙が出そうであった。この度の大震災で色々な場所で、被災者が体験した若い人達の力を更めて再認識したのはかえって皮肉としかいいようがない。私達医療従事者は日頃より、患者さんや、地域住民の人達にいかに対応すべきかを考えて行動して来たつもりであった。しかし今回の様な異常な極限状態での対応となると、混乱は必至である。日頃からの訓練も空泡になりかねないが、私達の組織、病院職員の日頃からの和がこのことをかなり解決に向けてくれることと身をもって体験した。今後災害時のマニュアル化は当然必要であり、急がねばならないが、私達は日常診療、日常業務の中で常に互いの和を大切にし、部門を越えて他を知ることが、色々な状態での対応に柔軟性を出せるのではなかろうか。最後に今回の大震災に際して職員一同一丸となり診療にあたられたこと、復旧、復興に対しても予想以上に早かったことはすべての人に感謝すべきことであるが、特に神戸製鋼本社の関連各位には深甚の敬意を表する。